

中学生に なに読もう？

—戦争と平和の絵本—

中学生に絵本の読み聞かせをしてみようという方を対象とした、テーマごとのリストです。
図書に関する記載事項は、書名・編著者名・画家名・訳者名・出版社・大きさ・ページ数・ISBN・通して読むのにかかる時間の目安の順になっています。

オットー —戦火をくぐったティベアー— トミー・ウンゲラー著 鏡 哲生訳 評論社

30cm 32p 978-4-566-00800-7 9分

オットーは、第二次世界大戦前にドイツで生まれたクマのぬいぐるみです。ユダヤ人のデビッドからドイツ人のオスカーへ友情の証にと送られ、その後数奇な運命をたどっていきます。表情豊かなオットーを中心に、戦争によっても壊れなかった人のきずなが描かれています。

きぼう —こころひらくとき— ローレン・トンブソン著 千葉茂樹訳 ほるぷ出版

25×27cm 32p 978-4-593-50515-9 3分

苦難にあった子どもたちの、かなしむ、怒る、手をさしのべられる、また、目の前のことに幸せを感じる表情が、大きく活写されています。その写真1枚1枚が力強く迫り、希望はすぐそこにある、私たちの中にあると語りかけます。

くつがいく 和歌山静子著 童心社 21cm×23cm 35p 978-4-494-01969-4 3分

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ。ぼくたちくつはせんそうにいく。うみをわたってとなりのくにへ。外国を戦場に、人々を踏みにしてぼろぼろになっていく靴をとおして、戦争の悲惨さを描きます。くつきりとした輪郭の絵と淡々とした文章のなかに、平和を希求する心がこもっています。



すみれ島 今西祐行著 松永禎郎絵 偕成社 25cm 32p 978-4-03-438060-4 5分

昭和20年の春、ある学校の真上を毎日のように飛行機が飛んでいました。子どもたちは、その航空隊の兵隊さんに手紙を書き、すみれの花たばをおくります。二度と帰ることができない特攻隊の若者の思いを、語りかけるような文章と淡い色彩の絵で描いており、命の尊さを伝えます。



せかいいいちうつくしいぼくの村 小林 豊著 ポプラ社

22cm×29cm 39p 978-4-591-04190-1 12分

ヤモは、内戦の続くアフガニスタンのある村に住む少年です。ある日、とうさんと果物を売りにまちへでかけました。戦争の影が見え隠れしながらも、幸せに続いていく村の生活を、色鮮やかな絵で描いていきます。結末の、突然とも思える一文が戦争の理不尽さを伝えます。続編に『ぼくの村にサーカスがきた』『せかいいいちうつくしい村へかえる』があります。

せんそう 一昭和 20 年 3 月 10 日 東京大空襲のことー

塚本千恵子著 塚本やすし絵 東京書籍 27cm 47p 978-4-487-80873-1 9 分

東京大空襲を奇跡的に生き延びた「わたし」を語り手に、太い輪郭線とはっきりとした色づきの絵で、さまざま空襲の様子を描写しています。簡潔な言葉で事実を淡々と紡ぎ、最後の一言には戦争の悲惨さ、戦争への怒りが滲みでています。

トビウオのぼうやはびょうきです いぬいとみこ著 津田櫓冬絵 金の星社

24×25cm 29p 978-4-323-00250-7 10 分

アメリカの水爆実験を、海の生き物たちの物語として描いています。トビウオの父さんは吹き飛ばされ、海に白い灰が降って、ぼうやは被爆して病気になります。淡い緑と、ブルーグレイを基調とした印象的な絵柄は、南の海の惨劇を、今も静かに伝えます。

非武装地帯に春がくると イ オクベ著 おおたけきよみ訳 童心社

26cm 34p 978-4-494-01966-3 8 分

朝鮮半島には、人間が入ることのできない非武装地帯があります。四季の移ろいの中、自由に行き来できる生きものたちの様子と、展望台にたたずんだまま平和を願うおじいさんの気持ちの対比を、あたたかみのある色調の絵で丁寧に描きます。



ひろしまのピカ 丸木 俊著・絵 小峰書店 24×25cm 47p 978-4-338-02201-9 15 分

1945 年 8 月 6 日、人類初めての原子爆弾が広島に投下されました。7 歳のみいちゃんとお母さんは、炎に追われ、広島の町をさまよいます。原爆投下直後の光景をありのままに描いた絵からは、戦争の恐ろしさがひしひしと伝わってきます。

へいわってどんなこと？ 浜田桂子著 童心社 21×23cm 36p 978-4-494-01964-9 3 分

平和について、子どもたちが身近に感じられることを、順々に取り上げていきます。やさしく簡潔な言葉がテンポよく全体を先へ進め、絵は親しみやすく、躍動感があります。争いは黒やグレーを、平和は黄色を基調にした温かい色を使って対比させています。

ふるさとにかえりたい ーリミヨおばあちゃんとヒバクの島ー

羽生田有紀著 島田興生写真 子どもの未来社 31cm 27p 978-4-86412-071-5 15 分

リミヨおばあちゃんのふるさは、マーシャル諸島のロングラップ島です。彼女が 13 歳の時に、アメリカの水爆実験のため住民たちは被爆し、島を離れなくてはなりません。リミヨおばあちゃんを語り手に、長年にわたり放射能に苦しめられる人々の姿を記録した写真絵本です。

まちゃんと 松谷みよ子著 司 修絵 偕成社 25cm 32p 978-4-03-438010-9 5 分

昭和 20 年 8 月 6 日、もうじき 3 つになる子が原子爆弾で死に、鳥になりました。その鳥は今でも飛んでいるのです。幼い子に語りかけるような平易な言葉と美しい色彩の絵からは、戦争のこわさや平和を願う心が伝わってきます。